

より良い

コミュニケーション講座

連載：看護のコミュニケーション 2

(各年代の血友病患者さんに対する看護師のかかわり)

思春期

早川友香

奈良県立医科大学附属病院生命倫理監理室小児看護専門看護師

はじめに

近年のめざましい血友病治療の発展により、血友病患者のQOLの向上は著しく、われわれ医療者、とくに看護師の指導力の向上が求められる時代になってきている。しかし、思春期の患者とのコミュニケーションには難渋することが多く、アドヒアランスの低下も問題となりやすい(図1)。“思春期をどう過ごすか”によりその後の人生に身体的にも心理社会的にも大きな影響を及ぼすことが予想される。



思春期の血友病患者の実際

事例1) 重症血友病の高校生の男子、定期補充療法ではなくオンデマンドになっている。

Ns (看護師) 「どうして定期補充療法していないの？」

Pt (患者) 「(定期補充療法)したところで治らんもん」

事例2) 定期補充療法の練習を頑なに拒んでいる中学生。

Ns 「定期補充療法をどうしてしたくないの？」

Pt 「お母さんがやってくれるからいい。俺は無理はしないから」

思春期血友病患者は、過去の病気説明の理解は曖昧であるが、生活のなかで止血しにくい身体ということは知っている。大きな支障がない生活をしていても活動に制限があることを意識しながら普通に生活していると認識しており、自分の身体とうまく付き合うことで学校生活を積み重ねている。出血時には「なんか身体がおかしい、やばい感じがする」と過去の経験との比較で評価し対処する。しかし出血時でもやりたいことを優先することもあ